

「日々の理科」(第 1553 号) 2018 (H30), 10, 09

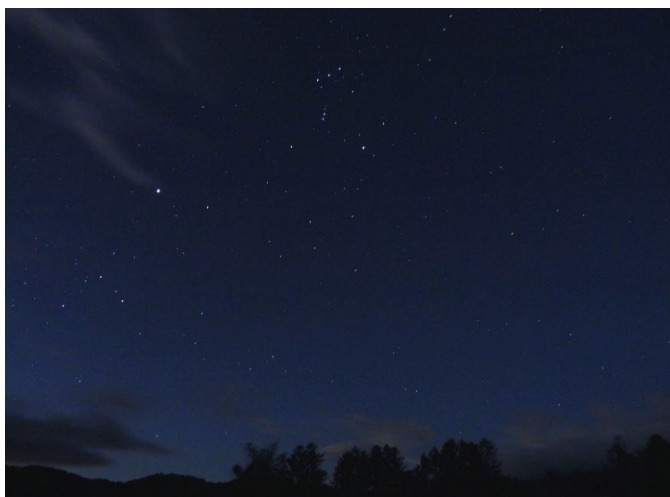
「二十七日月を撮る(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

10月7日未明の二十七日月は、最初東の空に残った雲に隠されていた。私はその間、恒星の写真を撮って待つことにした。

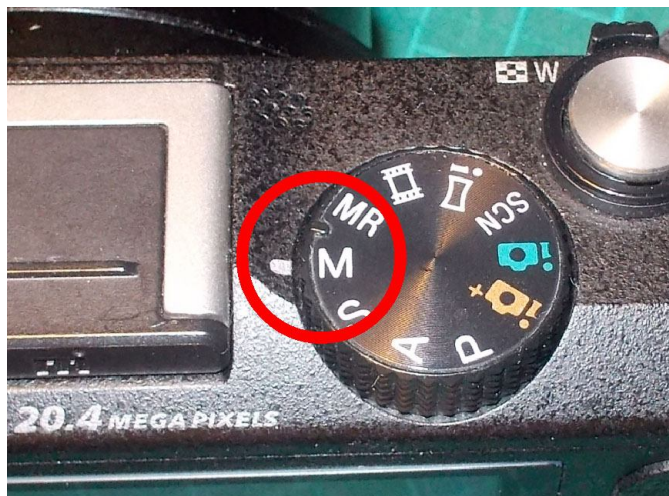


秋とはいえ明け方になると、すでに秋の星座はほとんど西に傾き、冬の星座が南中していた。写真の一番明るい星は「おおいぬ座」のシリウス、その右上に「オリオン座」の一部も写っている。よく見るとオリオンの足元に「うさぎ座」や「はと座」も全部写っている。(2頁ページ目に拡大画像・解説画像あり)



こんな天体写真は、専門的な一眼レフカメラでないと撮影できないと思う方も多いだろう。しかし、私が使ったのは、上写真のようなごく普通のコンパクト・デジタルカメラ(ソニー **DSC-HX60V**)である。一台目は新品で買って、2年ぐらい快調だったのだが、残念

ながら落下させてしまい、液晶画面にヒビが入り、お釈迦になってしまった。新品は5万円ぐらいするので、2台目はAmazonの中古で購入、15,000円で済んだ。おかげで、充電器やバッテリー、コード類は2台分あって便利になった。



このカメラのすばらしい点は、さまざまな自動撮影モードに加えて、M(マニュアル)モードがあることだ。天体写真—特に月の拡大写真では、露出が非常に重要だ。このカメラでは一眼レフなみに、シャッタースピード(30秒まで対応)、絞り、ISO(感度)の調節が自由に設定できる。その威力は、オーロラも写せることで証明できた。



この写真がこのカメラで撮影したオーロラ写真である。月明の中、淡いオーロラだったが、実に肉眼で見た通りに写っているのに驚いた。さすがにバッテリー容量が小さく、寒さには弱かったが、30分ぐらい連続で撮影できた。

もう一つは、暗視野でのフォーカスが鋭いことだ。つまり自動ピントで恒星やオーロラを写せるということである。なかなかキてるカメラだと思う。

